

側にクランクして町屋の地境の排水溝につながるが、安政絵図では地境の排水溝が直線的に町屋の地境の排水溝に直結している。安政絵図では、戸田中務家と空白地における地境の排水溝が東側に移動し、天保から安政にかけて戸田家の敷地が東側に移動していることが分かる。それに加え、天保絵図にて合致した地境の排水溝（SD08・79）が天保年間（1830年～1844年）から安政元年（1854年）までの間に地割が変化する。その際に、武家屋敷地境の排水溝（SD08・79）を埋め、さらにその後埋められたSD08上にSK10・11・12を構築し、ゴミを廃棄したものと考えられる。以上のことから、SD08は天保（19世紀前半）までの遺構であり、SK10・11・12は安政（19世紀中頃）以降の遺構であることがいえる。また、SD08より新相を示し、SK10・11・12とはほぼ同時期に構築されたと考えられるSK53より「戸田式部」と墨書きされた木札が出土したこと、戸田家の屋敷地であったことを物語っている。しかし、ここで疑問が残るのは、作りかえを行なったそれ以前の武家屋敷地境の排水溝が本調査区から検出されなかったことである。

4枚の絵図を比較してみると、天保絵図以外の絵図では地境の排水溝は東側に位置しており、本調査区C-2区の中央において検出されるはずである。しかし実際に検出されていないのは、第Ⅲ章基本層序において述べたように、C-2区中央付近にて地山が急変することに関係があると考える。これは、比較的新しい時期に地盤改良が行なわれていた可能性が指摘できる。C-2区中央からB区にかけて搅乱が多く、江戸時代の明確な遺構が検出されなかったのもそのためであろう。

石組み水路の下層から古相の溝が検出された（第Ⅳ章第17図断面図参照）。これは石組み水路を構築する前の背割下水であると考えられる。背割下水は普遍的に存在するものの、石組み水路以前の背割下水が周辺からは検出されなかった。これは、造成や水路の改変などにより作り替えが行われていたとしても、ほぼ同位置において作り替えが行なわれていたと考える。最終的なものが今回検出された石組み水路であり、その帰属時期は19世紀前半のものである。

また、武家屋敷地境の排水溝は各絵図において移動していたのに対し、町屋敷地の地境の排水溝の位置が変化していないことが見て取れる。町屋敷地の内部の区割りなどは変化していたのであろうが、区画そのものは変化していないのではないだろうか。個々の武家屋敷地が拡大・縮小を繰り返しており、その都度地境の排水溝の移動、作り替えが行われていたと考える。藩士の知行の増減により敷地が増減していたか、あるいは地位の向上・転落のため移動があったのかは不明であるが、武家屋敷地の区画が頻繁に変化していたことには間違いない。以上絵図を基に検証を行なった。武家屋敷地と町屋敷地では土地利用の仕方が若干違い、武家屋敷地は転出入が多く地割りが頻繁に変化するのに対し、町屋敷地は一つのブロック内においてはほとんど地割りが変化していないのではないだろうか。武家屋敷地での土地利用法や町屋敷との関係、石組み水路の流水方向など検討する予知がある。今後更なる考古学的資料、文献資料等の充実化を図り考究の進化を図りたい。

（小川）

### 第3節 板絵の内容について

SK10・11・12のサブトレンチから出土の板絵は、左側面に3ヶ所の釘跡（おそらくは竹釘と推定される）があり、右側縁は割れた痕跡を示す。このことから絵札の右側には絵柄が続き、全体としては17.2cm（5寸7分）四方の板絵で、左右または周囲に額板を配していたと推定される。

描かれている絵柄は、梅鉢紋を染め抜いた紋幕、束帯姿の武官、吽形の狛犬で構成される。

束帯姿の武官は、纓の部分が垂れている垂纓の冠を被り、冠の左右には馬毛の綾（おいかけ）

を付け、長弓を携え、3本の飾矢を入れた胡籠（ころく）を腰に着ける。衣服は、袖が両側に張り出し長い袍を着用し、袴を穿いている。

狛犬は獅子顔で、耳をだらりと下げている。頭頂には一角があり、口は左右に開いて歯を僅かに見せる。

これらの構成は、神社幕+隨神+狛犬と理解される。隨神は主神を護持するもので、向って左に描かれたこの武官は矢大臣（右大臣）を表現している。隨神の右上、板絵中央には主神が描かれるはずであるがここでは欠損している。

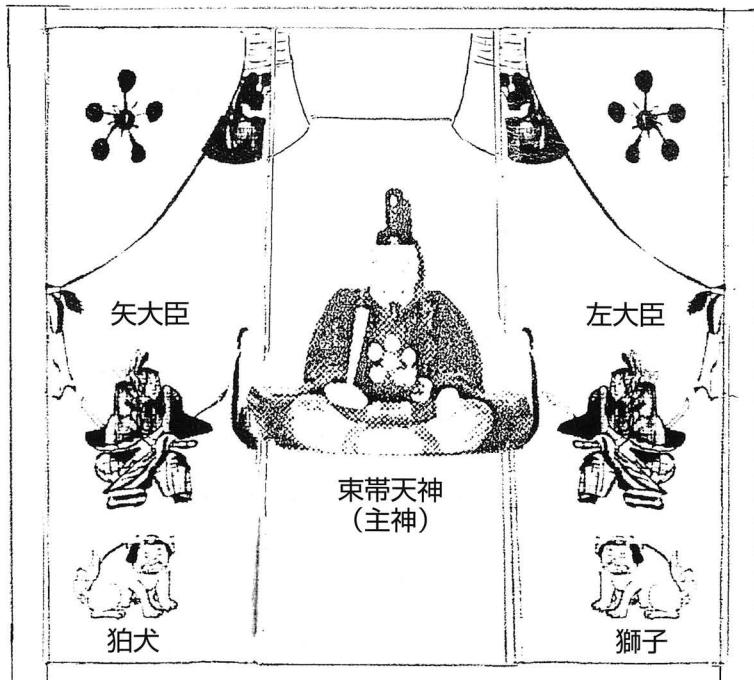
主神は、紋幕に梅鉢紋を使用していることから、天神（菅原道真公）と推定される。富山藩では初代藩主前田利次が天神町淨禪寺境内に天満宮を置いて祈願所としており、天神信仰に篤かつたといわれる。

以上より欠損している右3分の2を復元すると第75図のようになる。中央の主神である天神は束帶姿で、その右下には矢大臣に対置して束帶姿の左大臣、その下には阿形の獅子姿の狛犬が復元されるであろう。

このような神社幕+主神+隨神+狛犬を上から順に描く形式の図像は、室町期の明神図以降に多くみられる。

富山においては、弘化3（1846）年以降土天神と呼ばれる土製天神人形が流行する。これは主に武家・大商家などの上流階級に好まれたもので、土天神+左大臣+右大臣+狛犬+燈籠で1セットとなる。紋幕と燈籠は副次的な構成要素として捨象すればその基本構成は板絵と一致しており、天神人形のセットが板絵からそれを具現化した土製神人形のセットへの変遷が見て取れる。

このような形で天神信仰は富山において普及が始まったとみられる。出土した板絵は、藩政期の上流階級における天神信仰形態を示す資料として重要であるといえる。 (古川)



第75図 天神板絵の復元試案